九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

複合動詞「動詞連用形+かける」の研究

呂，芳

https://doi.org/10.15017/1398299

出版情報：九州大学，2013，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名・(本籍・国籍)	呂（ロ）　芳（ホウ）（中　国）
学位の種類	博士（比較社会文化）
学位記番号	比文博甲第２１５号
学位授与の日付	平成25年9月30日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　比較社会文化学府　日本社会文化専攻
学位論文題目	**複合動詞「動詞連用形+かける」の研究**
論文調査委員	（主　査）教　授　山　村　ひろみ
	（副　査）教　授　松　村　瑞　子　　准教授　西　山　　猛
	名古屋大学　教　授　籾　山　洋　介
	名古屋大学　准教授　杉　村　　泰

論　文　内　容　の　要　旨

複合動詞「動詞連用形+かける」は、日本語の複合動詞の中でも使用頻度が高い、いわゆる典型的な複合動詞のひとつであるにも拘わらず、これまでそれを中心に扱った研究は極めて少なかった。本論文は、そのような複合動詞「動詞連用形＋かける」の実態を、特に同形式の後項動詞である「かける」と本動詞「かける」との意味的・統語的な関係、前項動詞と後項動詞「かける」の意味的・統語的関係といった観点から明らかにした複合動詞「動詞連用形＋かける」の総合的研究である。以下、本論文を構成する各章の内容を示す。

第 1 章では、本論文の目的と研究方法を述べ、第 2 章では、先行研究を概観した。

第 3 章では、複合動詞「動詞連用形+かける」の意味機能に深く関わる本動詞「かける」の様々な意味を、その格体制、また、その「ヲ格」「二格」に出現する名詞の特徴に注目しながら整理した上で、ラネカー(1987,1988)に基づき、各意味の間の関係を説明する本動詞「かける」のネットワーク・モデルを提示した。

第 4 章では、複合動詞「動詞連用形+かける」の意味用法を、第 3 章で明らかになった本動詞「かける」の意味特徴との関係という観点から検討した。まず、複合動詞「動詞連用形+かける」は、影山(1993)が提示した統語的テストに従って「指向」を表す語彙的複合動詞「v かける」と「始動」局面を表す統語的複合動詞「V かける」に分けられることを示した。次に、「指向」の「v かける」は、その意味特徴および格体制から本動詞「かける」の拡張と見なされること、一方、「始動」の「V かける」は、それが表わす「当該事態の中断」という意味が本動詞「かける」の基本的用法が表す「対象の＜「点的」な接触＝不安定(不完全)な接触＞」と概念的に関わっていることから本動

詞「かける」の拡張と見なされることを明らかにした。

第5章では、語彙的複合動詞「vかける」の前項動詞(v)と後項動詞「かける」の意味的・統語的関係を影山(1993)が提唱する語彙概念構造理論を用いて考察した。その結果、前項動詞(v)と後項動詞「かける」の関係については、① (i)前項動詞が後項動詞の「手段」または「様態・状況」と解釈されるタイプ、(ii) 前項動詞と後項動詞が「補文関係」になるタイプ、(iii) (i)(ii)のいずれのでもないタイプの三種類があること、②語彙概念構造理論は(i)(ii)のタイプはうまく説明できるが、(iii)のタイプは説明できないことを示した。

第6章では、統語的複合動詞「Vかける」の「タ形」、すなわち、「Vカケタ」の意味特徴と前項動詞の種類の関係を考察した。その結果、「Vカケタ」は当該事態が「中断」したことを表すが、開始点と終結点の二つの限界点を持つ動詞が前項動詞になった場合の「中断」は、当該事態の開始そのものの「中断」、あるいは、開始した当該事態が終結点へ到達することの「中断」を表し、開始点と終結点が重複した一つの限界点しか持たない動詞、あるいは、限界点として開始点しか持たない動詞が前項動詞になった場合の「中断」は、当該事態の開始そのものの「中断」を表すことを示した。

第7章では、寺村(1984)が同じ「始動局面動詞」と呼ぶ「Vかける」「Vはじめる」「Vだす」の間に見られる相違点をその「タ形」を基に考察した。その結果、①「Vカケタ」は工藤(1995)の動詞分類の中の「主体変化動詞」また「内的限界動詞」を前項動詞として取りやすいのに対し、「Vハジメタ」「Vダシタ」は共に工藤(1995)の分類の中の「主体動作動詞」を前項動詞として取りやすく、前項動詞の限界性の有無については明示的な傾向は見られなかった、②「Vカケタ」は当該事態の「中断」、「Vハジメタ」は当該事態が開始後、終結点に向かって展開したこと、「Vダシタ」は当該事態の突発的な「開始」のみを表すことが明らかになった。

第8章では、統語的複合動詞「Vかける」の意味機能とテンス・アスペクトの関係を考察した。その結果、①完成相の「Vかける」、継続相の「Vかけている」の意味解釈には前項動詞の「限界点」のあり方が関係する、②限界点が一つしかない動詞の完成相「Vかける」は当該事態が開始する前の「中断」、その継続相「Vかけている」は当該事態の開始点への「接近」を表す、③開始点と終結点の二つの限界点を持つ動詞の完成相「Vかける」のうち、当該事態の開始前の局面が認知しにくい動詞の完成相「Vかける」は当該事態が開始した後の「中断」、その継続相「Vかけている」は当該事態の開始後の終結点への「接近」を表し、当該事態の開始前の局面が認知しやすい動詞の完成相「Vかける」は当該事態の開始の「中断」および当該事態が開始した後の「中断」、また、その継続相「Vかけている」は当該事態の開始点あるいはその終結点への「接近」の両方を表すことを明らかにした。

第9章では、本論文のまとめと今後の課題を述べた。

論文審査の結果の要旨

複合動詞「動詞連用形+かける」は、日本語の複合動詞の中でも使用頻度が高い、いわゆる典型的な複合動詞のひとつであるにも拘わらず、これまでそれを中心に扱った研究は極めて少なかった。本論文は、そのような複合動詞「動詞連用形＋かける」の実態を、特に同形式の後項動詞である「かける」と本動詞「かける」との意味的・統語的な関係、前項動詞と後項動詞「かける」の意味的・統語的関係といった観点から明らかにした複合動詞「動詞連用形＋かける」の総合的研究である。

第1章では、本論文の目的と研究方法を述べ、第2章では、先行研究の概観が行われた。

第3章では、複合動詞「動詞連用形+かける」の意味機能に深く関わる本動詞「かける」の様々

な意味を、その格体制、また、その「ヲ格」「二格」に出現する名詞の特徴に注目しながら整理した上で、ラネカー(1987,1988)に基づき、各意味の間の関係を説明する本動詞「かける」のネットワーク・モデルが提示された。

第 4 章では、複合動詞「動詞連用形+かける」の諸用法が本動詞「かける」の意味特徴との関係という観点から検討された。その結果、影山(1993)の統語テストに拠り語彙的複合動詞と判断された「指向」の「動詞連用形＋かける」（以下、v かける）は、その意味特徴および格体制のいずれの面からも本動詞「かける」の拡張と見なされるが、同統語テストにより統語的複合動詞と判断された「始動」の「動詞連用形+かける」（以下、V かける）は、本動詞「かける」の基本的用法が示す「対象の点的な接触＝不安定(不完全)な接触」と概念的に関わっているだけであることを明らかにした。これは「V かける」の方が「v かける」よりも文法化されたものであることを示すものである。

第 5 章では、語彙的複合動詞「v かける」の前項動詞と後項動詞「かける」の意味的・統語的関係が影山(1993)の提唱する語彙概念構造理論を用いて考察された。その結果、前項動詞と後項動詞「かける」の関係については、① (i)前項動詞が後項動詞の「手段」または「様態・状況」と解釈されるタイプ、(ii) 前項動詞と後項動詞が「補文関係」になるタイプ、(iii) (i)(ii)のいずれのでもないタイプの三種類があること、②語彙概念構造理論は(i)(ii)のタイプはうまく説明できるが、(iii)のタイプは説明できないことが示された。

第 6 章では、統語的複合動詞「V かける」の意味特徴と前項動詞の種類の関係が考察された。その結果、「V カケタ」は当該事態が「中断」したことを表すが、開始点と終結点の二つの限界点を持つ動詞が前項動詞になった場合の「中断」は、当該事態の開始そのものの「中断」、あるいは、開始した当該事態が終結点へ到達することの「中断」を表し、開始点と終結点が重複した一つの限界点しか持たない動詞、あるいは、限界点として開始点しか持たない動詞が前項動詞になった場合の「中断」は、当該事態の開始そのものの「中断」を表すことが示された。

第 7 章では、寺村(1984)が同じ始動局面動詞と呼ぶ「V かける」「V はじめる」「V だす」の間に見られる相違点がその「タ形」を中心に考察された。その結果、①「V カケタ」は工藤(1995)の動詞分類の中の「主体変化動詞」また「内的限界動詞」を前項動詞として取りやすいのに対し、「V ハジメタ」「V ダシタ」は共に工藤(1995)の分類の中の「主体動作動詞」を前項動詞として取りやすいが、前項動詞の限界性の有無については明示的な傾向は見られないこと、②「V カケタ」は当該事態の「中断」、「V ハジメタ」は当該事態開始後の終結点に向かっての展開、「V ダシタ」は当該事態の突発的な開始のみを表す、ことを明らかにした。

第 8 章では、統語的複合動詞「V かける」の意味機能とテンス・アスペクトの関係が考察された。その結果、①完成相の「V かける」、継続相の「V かけている」の意味解釈には前項動詞の限界点のあり方が関係する、②限界点が一つしかない動詞の完成相は当該事態が開始する前の「中断」、その継続相は当該事態の開始点への「接近」、③開始点と終結点の二つの限界点を持つ動詞の完成相のうち、当該事態の開始前の局面が認知しにくい動詞の完成相は当該事態が開始した後の「中断」、その継続相は当該事態の終結点への「接近」、また、同局面が認知しやすい動詞の完成相は当該事態の開始の「中断」および当該事態開始後の「中断」、また、その継続相は当該事態の開始点あるいはその終結点への「接近」の両方を表す、ことを明らかにした。

第 9 章では、本論文のまとめと今後の課題を述べた。

このように、本論文は複合動詞「動詞連用形＋かける」の多様な用法を意味・統語的に整理し、それを本動詞「かける」の振る舞いと比較対照させながら総合的に論じたという点でこれまでになかったものである。以上のことから、審査委員会は本論文が博士（比較社会文化）を授与されるに値すると判断した。